Osaka University Knowledge Archive

Title	西夏時代の河西回廊西部～中部における石窟寺院について：その分布と西夏による支配との関連性の考察を中心に
Author(s)	佐藤, 貴保
Citation	石窟史料からみた敦煌オアシス地域の研究. 2024, p. 33-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94650
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

西夏時代の河西回廊西部～中部における石窟寺院について

―― その分布と西夏による支配との関連性の考察を中心に ――

佐 藤　貴 保

1．はじめに

西夏王国が仏教を国家主導で信仰し，各地に仏教寺院遺跡や仏典が多数発見されていることは周知のとおりである．筆者は 2008 年以来，甘粛省敦煌市や粛北蒙古族自治県，瓜州県（以下，玉門市を含め，これらの地域を河西回廊西部と呼ぶ）に所在する西夏時代に新造もしくは重修されたと考えられている石窟寺院―莫高窟，五个廟石窟，榆林窟，東千仏洞―を訪れ，壁面に描かれた供養人像の服装や傍題の墨書を読み取り，現地付近のオアシスにいる官僚の一族によって新造・重修された石窟もあることを明らかにしてきた[1]．

石窟寺院はいずれもオアシスの水源となっている河川の上流の山地に造営されており，その新造ないしは重修に西夏の現地の官僚が関わっていたということは，西夏の支配が少なくとも石窟の所在する河川の上流域まで及んでいたことを示唆している．西夏の河西回廊支配の端緒は 1028 年の甘州（張掖）占拠とされるが，西部の瓜州や敦煌オアシスまで掌握するのは 1070 年代以降とされており，その実効支配がオアシスの背後（南側）にある山地のどのあたりまで及んでいたのかを検証するうえで，石窟の新造・重修の時期に関わるデータの収集は有益であると筆者は考える．

そこで本科研では，河西回廊西部の玉門市や，中部（酒泉市・張掖市・粛南裕固族自治県）の石窟寺院にまで調査対象を広げ，西夏時代に新造・重修された石窟がどのくらいあるのか，どのような場所に立地しているのかを実地調査で確認し，西部～中部における西夏の支配が山地のどのあたりまで及んでいたのかを考察することを計画段階では企図した．しかしながら，いわゆるコロナ禍の影響で長らく中国への渡航が困難であったため，先行研究で西夏時代のものと指摘されている寺院（石窟以外のものも含む）の情報を収集する作

1　佐藤 2010; 佐藤 2017; 佐藤 2019; 佐藤 2020 参照．

業を中心に行った[2]．そして 2023 年 8 月にようやく中国への渡航調査が実現し，これまで調査を行ってきた莫高窟，五个廟石窟，榆林窟に加え，西夏時代にも使用されたとされる瓜州県鎖陽城鎮の塔児寺遺跡，西夏時代の重修窟があるとされている玉門市昌馬郷の昌馬石窟，そして粛南裕固族自治県祁豊蔵族自治郷の文殊山石窟を，いずれも短時間とはいえ調査することがかない，調査時間が限られていたため調査は精緻なものとは言い難いものとはなったものの，文殊山石窟では先行研究が指摘する通り，西夏文の題記や供養人像を確認できた．

本稿ではまず，文殊山石窟での調査結果を報告し，塔児寺遺跡と昌馬石窟での調査も踏まえ，河西回廊西部～中部の石窟群から想定される西夏による当該地域における支配の状況を考察していきたい．

2．文殊山石窟前山万仏洞の供養人像と西夏文墨書

2023 年の調査では，文殊山前山万仏洞で西夏文の墨書や供養人像が確認できた．いずれも先行研究がそれらの存在をすでに指摘しており，カラー写真が公刊されている[3]が，写真では西夏文の墨書の有無を判別することは困難である．また，管見の限りにおいて，墨書の録文は未公表である．

公刊済みの写真では，南壁下部に少なくとも 9 身の供養人像が描かれている．ここでは壁面に向かって最も右に描かれている像を第 1 身，最も左に描かれている像を第 9 身とし，右から順に番号を振ることにする．壁面の中央に，蓮台とその上に赤色の正方形枠（傍題と思われるが，後代に書かれたと思われるチベット文に覆われ，読めない）が描かれ，これを挟んで右側に左向きに 2 身（第 1 身，第 2 身），左側に 7 身（第 3～9 身）描かれている[4]．第 2 身と第 3 身は坐像，それ以外は合掌した立像である．

第 2 身は供養人像の中で最も大きなスケールで描かれている．白い衣の上に赤い袈裟をまとい，山形の冠を被り，方形状の敷物に座っている．先行研究が既に指摘している通り，山形の冠は榆林窟第 29 窟主室南壁東側の男性供養人像群の上部に描かれる僧侶「真義国師鮮卑智海[5]」像が被る冠と酷似してい

---

2 李春元 2008; 敦煌研究院・甘粛省文物局 2011; 国家文物局 2011b を基にデータの収集を行った．

3 姚 2019, pp. 94-99 参照．

4 第 4 身と第 5 身，第 8 身の顔は左向きだが，それぞれ左隣の人物像と会話している様子で描かれており，体幹は右を向いている．

5 題記は西夏文で書かれている．漢訳は荒川 2017,p.311,TY123[Y29 Tang01]に基づく．

る[6]．榆林窟の「真義国師鮮卑智海」像のように高い須弥座には座っていないが，文殊山前山万仏洞に描かれたこの僧侶は，冠の形状から西夏時代の国師レベルの高僧である可能性が高い．この像の左に赤い傍題があり，漢文で

甘州府路指揮僉事許忠
到此
□□□年六月　日

と墨書されているが，傍題に書かれる内容としてはふさわしくなく，後代に加筆されたものであろう．漢文の 2 行目「到此」のすぐ下に，うっすらと西夏文字の「𗍫」の旁の部分のような墨書の残画が見えた．

第 3 身は，蓮台を挟んで左側に第 2 身と向かい合う形で描かれる剃髪の僧である．第 2 身と同じスケールで描かれており，冠を被らず白い内衣の上に赤い衣（襟や袖口は青色）をまとい，第 2 身と同じような方形の敷物に座っている．手を広げ，第 2 身の僧と会話しているようにも見える．前述の榆林窟第 29 窟主室南壁では，通路を挟んで右側に女性供養人像群が描かれているが[7]，「真義国師鮮卑智海」像と同じスケールで赤い袈裟と赤い内衣を着て座った尼僧が描かれており，榆林窟第 29 窟との類似性が認められる．第 3 身の頭部の右横には赤い傍題が描かれ，少なくとも左右 2 列に墨書が視認できる右列は漢字で「甘州府弟子」と書かれ，その下は双行で漢字が書かれるが，判読できなかった．左列は 11 字くらいの西夏文が書かれている．判読は難しく，ぼんやりと

□□□□□□□𘔀𘓐𘓐□

のように見えた．『夏漢字典』（李範文 2008）を参照すると，𘔀は「教習する」の意味[8]，𘓐は「時々，或いは」の意味[9]，𘓐は「明後日」や漢語「謝，仙」等の音写[10]，あるいは鳥の名称に使われるとされているが[11]，全体として文意が通じず，再度実見調査による判読作業を要する．

6　敦煌研究院 1990, pl. 117; 姚 2019, p. 94, pl. 1-117; 李甜 2022, pp. 318-319 参照．
7　敦煌研究院 1990, pl. 120 に一部の写真が掲載されている．なお，佐藤 2020, pp. 32-37 で，女性供養人像の服装などの特徴を解説している．
8　李範文 2008, p. 187, no. 1118 参照．
9　李範文 2008, p. 432, no. 2630 参照．
10　李範文 2008, p. 595, no. 3683 参照．
11　李範文 2008, p. 595, no. 3684 参照．

立像のうち，第 1 身は剃髪し，赤い服を着ている．頭部の左横に赤い長方形の傍題があるが，字は読み取れない．

第 4 身は，第 3 身より 1 頭身ほど低い高さで描かれている．剃髪し，赤色の内衣の上に赤色の袈裟をまとった僧である．第 4 身の視線は第 5 身と第 6 身の描かれている左下の方を向いている．頭部右上に赤い長方形の傍題があり（第 3 身の傍題より小さい)，「信女」という漢文が読み取れた．

第 5 身と第 6 身は，他の供養人像よりもかなり小さく描かれていて，子どもとみられる．いずれも赤い衣を着ている．第 5 身と第 6 身の傍題は書かれていない．

第 7 身は，第 4 身と同じ高さで描かれている．赤色の袖口の狭い袍を着て，内側下部に白いスカートを履き，白くとがった靴を履いている．頭部は判然としない．頭部右上に赤い長方形の傍題があるが（第 4 身の傍題よりさらに小さい)，ウイグル文の墨書に覆われて判読できない．

第 8 身と第 9 身は，第 7 身よりも 1 頭身ほど低い高さで，かつ少し小さなスケールで描かれている．どちらも第 7 身と同じ服装と履物をした女性像であり，頭部は髪を結っているようにも，冠（ただし，楡林窟第 29 窟の女性供養人像の冠のような形式には見えない）を被っているようにも見える．それぞれの頭部の上方に赤い長方形の傍題（第 7 身の傍題よりさらに小さい）があるが，字は判読できない．

第 2 身の僧の冠の形状，西夏文の墨書が確認できることから，この供養人像群が西夏時代に描かれたものである可能性はかなり高いとみられる．楡林窟第 29 窟の供養人像と似ているところがあるとはいえ，題記がほとんど判読できず，官人の服装をした者が確認できないため，この壁画がどのような人物の発願によって描かれたのかはわからないが，子どもの供養人像が描かれていることを考慮すると，特定の一族が関係していたのではないかと推測される．

3．西夏時代の新造・重修石窟の分布状況

前節で述べた通り，文殊山石窟前山万仏洞の供養人像は，西夏時代に描かれたものである可能性が高いとみられる．文殊山石窟前山千仏洞も西夏時代の重修とされている．先行研究によると，前山千仏洞の中心柱北壁下部に供養人像が二身向かい合って描かれていて，左側に円領衣を着て，腰に帯を締め，香炉を持った供養人像，右側に交領衣を着て，腰に帯を締め手に花を持った供養

人像が描かれており，西夏時代に描かれたものという[12]．今回の訪問では時間的な制約から充分な調査はできなかったが，頭部の不鮮明な赤や緑の服と白いスカートを履いた供養人像を三身確認した．各像の，壁面に向かって右横上部に赤い長方形の傍題があるが，字の判読には至らなかった．文殊山石窟は酒泉オアシスを潤す北大河（かつては黒河と合流してカラホト遺跡がある内蒙古自治区エチナ旗まで流れていた）の支流祁豊河（洪水河）の上流に所在している．先行研究の成果や筆者による実見調査の結果，西夏の支配が文殊山石窟の所在する地域にも及んでいた可能性が高いと言える．

今回の調査で初めて訪問した玉門市昌馬郷の昌馬石窟も，先行研究では西夏時代に重修したものがあると指摘されている[13]．筆者は第 2 窟で楡林窟と類似した色調の壁画を実見しており，ここにも西夏の支配が及んでいた可能性がある．昌馬石窟は，玉門市を流れる疏勒河の上流にあたり，現在の玉門市街がある地域から一つ峠を越えてさらに南の谷の崖に造営されている．西夏時代における昌馬石窟を含む玉門地域の状況については，文字記録が一切残されておらず，どのあたりにオアシスが形成されていたのかはわからない．西夏では都の中興府（寧夏回族自治区銀川市）との周辺以外の地域は監軍司の管轄下に置かれる．昌馬石窟のある地域は粛州監軍司か瓜州監軍司の管轄下に置かれていたものと推測される．唐代の瓜州城が鎖陽城遺跡に比定され，その遺跡に隣接する塔児寺遺跡が唐〜西夏時代のものとされていることから，西夏時代の瓜州監軍司の治所も鎖陽城に置かれていた可能性が高い．さすれば，昌馬石窟が所在する地域は粛州監軍司の治所（酒泉市粛州区と推定される）よりも距離的に近い瓜州監軍司の管轄地域に属していたと推定するのが妥当であろう．

瓜州県の楡林窟や東千仏洞が西夏時代に新造・重修されたものであることは，題記や供養人像が実在することから，もはや疑いはないだろう．これらの石窟も瓜州監軍司の治所が所在していたであろう鎖陽城遺跡[14]よりも，もう一つ南の山を越えた標高の高いところ（楡林窟は楡林河の上流）に位置している．筆者がまだ調査を行っていない瓜州県の小千仏洞（下洞子石窟．鎖陽城鎮．楡林窟まで南東に 12km）では西夏重修窟が[15]，旱峡石窟（鎖陽城鎮）では西

---

12 姚 2019, p. 7 参照．なお,李甜 2022, p. 243 では，供養人像の服装，持ち物の説明が左右逆転している．李甜 2022, p. 243 に掲載されている写真を見る限り，壁面に向かって左側に交領衣，右側に円領衣の供養人像が描かれていると判断される．

13 敦煌研究院・甘粛省文物局 2011, p. 201 参照．

14 張多勇［2022, pp. 369-370］は，鎖陽城遺跡から多数の北宋期の銅銭が出土していることから，この遺跡が瓜州監軍司の治所だと論じている．

15 李春元 2008, pp. 234-235 参照．

夏重修窟や西夏文題記が[16]，碱泉子石窟（鎖陽城鎮）では西夏文の紙片が発見されているという[17]．これらの情報が事実ならば，これら石窟の位置を『中国文物地図集　甘粛分冊（上）』に掲載されている地図を見ると，旱峡石窟と碱泉子石窟は楡林窟と東千仏洞を結ぶ直線の中間に位置する[18]．これらの石窟が所在する地域まで西夏の支配が及び，瓜州県の石窟群が瓜州監軍司の治所と沙州や粛州を結ぶ交通路の背後を固めるかのように開鑿されているようにも見える．

既に別稿で指摘しているが，西夏で編纂・刊行された百科全書『聖立義海』の山の名称を説明した章の中で，「燕支上山（張掖付近の祁連山脈と推定される）」の説明と「沙州聖山」の説明との間に，「聖変徳山」なる見出し語があり，次のような記述がある．

> 敘𢦏𢦏𢦏 𢦏𢦏敘𢦏𢦏𢦏 𢦏𢦏敘𢦏𢦏𢦏 𢦏𢦏敘𢦏𢦏𢦏[19]
> 聖変徳山 玉体や聖なるものの化身や仏が実際に現れる．民の福を求めるところである．

この記述は，酒泉・玉門・瓜州地域の山地を解説した文章とみられる．『聖立義海』は，乾祐十三（1182）年に西夏の官庁である刻字司が刊行した刊本である．そうしたいわばオフィシャルな刊行物において，この地域の山地を「仏が実際に現れる」という表現していることは，この山地が仏教信仰において重要な場所であることを西夏の中央政府も認識していることを示唆している．そうした山地における仏教信仰を容認ないしは支援しようとする中央政府の姿勢も読み取れるのではなかろうか．

そして，多数の西夏文題記が確認されている莫高窟は敦煌オアシスを潤す宕泉河の上流，西夏時代の重修窟があるとされる五个廟石窟は，同じく敦煌オアシスを流れる党河の上流に位置している．これら石窟は沙州監軍司の管轄下のもとで新造・重修がなされたのであろう．

---

16 李春元 2008, pp. 236-239; 張宝璽 2011; 国家文物局 2011b, p. 310 参照．

17 李春元 2008, pp. 239-201; 国家文物局 2011b, p. 311 参照．

18 国家文物局 2011a, pp. 200-201 参照．

19 佐藤 2016, pp. 56-57 参照．　原文の写真版は Кычанов1997, p. 305 参照．この箇所を Кычанов［1997, p.115］は「賢者の生まれた素晴らしい（場所である）山．玉体，賢く生まれた仏陀の体が真に現れる．（山は）民の無事を祈る場所である」と露訳している．

４．おわりに

このように見ていくと，河西回廊のうち，中部の酒泉オアシス以西の地域においては，オアシスの水源となる川の上流域で石窟の新造・重修が行われていたこと，その事業に西夏の官僚や高僧が関係するものもいくつかの石窟で認められるとともに，その存在は西夏の支配がオアシス地域の背後にある上流にまで及んでいること示唆する傍証となり得よう．

先に挙げた『聖立義海』では，張掖以東の祁連山脈については仏教信仰にまつわる説明がなされていない．その一方で，そうした地域でも多数の石窟寺院が造営されていたことが明らかになっている．現時点で筆者による実地調査の最東端は文殊山石窟であり，それより東に立地する石窟寺院の中に西夏時代に新造・重修されたものがどのくらい確認できるのか，そうした石窟が地理的にどのような場所に立地しているのかを今後調査していきたい．

参考文献（著者名ＡＢＣ順）

荒川慎太郎
2017　「敦煌石窟西夏文題記銘文集成」松井太・荒川慎太郎（編）『敦煌石窟多言語資料集成』府中（東京），東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，pp. 248-333.

敦煌研究院（編）
1990　『中国石窟　安西榆林窟』東京，平凡社.

敦煌研究院・甘粛省文物局（編）
2011　『甘粛石窟志』蘭州，甘粛教育出版社.

国家文物局（編）
2011a　『中国文物地図集　甘粛分冊（上）』北京，測絵出版社.
2011b　『中国文物地図集　甘粛分冊（下）』北京，測絵出版社.

Кычанов, Е. И.
1997　*Море значений, установленных святыми*. Санкт-Петербург, Центр《Петербургское Воттоковедение》.

李春元
2008　『瓜州文物考古総録』香港，香港天馬出版公司.

李範文
2008　『夏漢字典（修訂版）』北京，中国社会科学出版社.

李　甜
2022　『文殊山石窟研究』蘭州，甘粛教育出版社.

佐藤貴保
2010　「榆林窟第 29 窟男性供養人像に見る西夏の官制―官僚登用制度を中心に―」

『西夏時代の河西地域における歴史・言語・文化の諸相に関する研究（科学研究費補助金　基盤研究（C）　研究成果報告書）』pp. 1-10.
2016 「西夏の河西回廊支配―出土史料からの再検討―」坂尻彰宏（編）『出土文字資料と現地調査からみた河西回廊オアシス地域の歴史的構造』平成 25 年度～平成 27 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)：課題番号 25370831）成果報告書，pp. 45-61.
2017 「敦煌石窟西夏期漢文墨書・刻文集成」松井太・荒川慎太郎（編）『敦煌石窟多言語資料集成』府中（東京），東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，pp. 336-362.
2019 「楡林窟第 29 窟主室西壁西夏供養人像・供養人題記集成（稿）」，佐藤貴保（編）『西夏王国の人名に関する研究―多民族国家における文化交流・融合の視点から―』平成 27～30 年度日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤研究（C）：課題番号 15K02906）研究成果報告書，pp. 51-64.
2020 「楡林窟第 29 窟供養人像に見る西夏の河西回廊支配」『比較文化研究』30, pp. 23-43.

姚桂蘭（主編）
2019 『文殊山石窟』蘭州，甘粛人民美術出版社.

張宝璽
2011 「西夏瓜州旱峡石窟」『西夏学』7, pp. 232-234.

張多勇
2022 『西夏監軍司遺址及軍事布局』北京，中華書局.